

鎌倉の埋蔵文化財5

Buried Cultural Properties in Kamakura 5

平成12年度発掘調査の概要



平成14年 3 月
鎌倉市教育委員会

～ご あ い さ つ～

私たちの暮らす鎌倉の地下には、埋蔵文化財といわれる遺構や遺物が往時の姿のまま今でもたくさん遺っています。これらの埋蔵文化財は残念ながら、さまざまな土木工事等の実施によって現状保存をできないことが少なくありません。工事で失われてしまう埋蔵文化財と現代の市民生活の調和をはかるために、現状保存の叶わない遺跡については発掘調査を実施して可能な限りの記録化を図り、その様子を今日の私たちが理解できるようにすると同時に将来へ伝え、活用してゆくこととしています。

鎌倉市教育委員会では発掘調査関係者のご協力をえながら、『鎌倉の埋蔵文化財』の発行をはじめ、文化財めぐりでの発掘調査現地説明会、鎌倉駅地下道ギャラリーでの埋蔵文化財パネル写真展、遺跡調査・研究発表会などの事業を実施して発掘調査の成果を皆様にご紹介してきました。

『鎌倉の埋蔵文化財』5では平成12・13年度に発掘調査を実施した遺跡のなかから、代表的なものを選んでその概要をお知らせいたします。本誌をご覧になる皆様にも、発掘調査の現場から遺跡を舞台に当時を生きた人々の息使いが聞こえてくるのではないのでしょうか。これからさまざまなかたちで発掘調査の成果をお知らせするように努めてまいりたいと思います。

～目 次～

1. 鎌倉大仏周辺の発掘調査……	2
2. 史跡建長寺境内の発掘調査…	5
3. 水道山遺跡……………	7
4. 材木座町屋遺跡……………	9
5. 大倉幕府周辺遺跡群……………	11
英文要旨……………	13

～例 言～

- ◎本書には平成12年度に市内で実施された主な遺跡の発掘調査の概要を掲載しました。
- ◎本書に掲載した遺跡の調査概要はそれぞれの調査担当者に執筆をお願いし、編集は鎌倉市教育委員会文化財課が担当しました。
- ◎本書の作成にあたり、次の方々のご協力をいただきました。深く感謝をいたします。

大三輪龍彦、河野真知郎、佐藤孝雄、鈴木啓介、滝澤晶子、田代郁夫、継実、原廣志、福田誠、宮田眞、森孝子、若松美智子（順不同・敬称略）

《表紙写真の説明》

材木座町屋遺跡全景写真

◎表紙題字は松尾右翠氏に揮毫をお願いしました。

1. 鎌倉大仏周辺の発掘調査

幻の大仏殿の存在を解明する

長谷四丁目に所在する鎌倉大仏は、鎌倉の世界遺産登録推進のため平成12・13年度に像の周辺（高德院境内）で発掘調査が実施されました。

鎌倉大仏は正式にはこくほうどうぶつあみだによらい国宝銅造阿彌陀如来坐像ざざうといい、像高11.39m、重量約122t、奈良東大寺の大仏（像高14.85m）に次いで、現存する坐像としてはわが国2番目の巨大なみほとけです。

最初の大仏は木造であったといい（『東関紀行』、暦仁元年（1238）「大仏堂」（大仏殿）を造営する儀式が行われました（『吾妻鏡』）。

ところで、現存する銅造大仏が鑄られ始めたのは、ほうじょうときより北条時頼（1227～1263）が5代執権であった建長4年（1252）といえます。にちりんしょうにんしょうじょう日蓮上人書状には北条氏のうち名越氏が深く関わったことが書かれており、大仏鑄造と大仏殿建立という一大事業に、幕府のうしろだてがあったことが想像されます。

その後、大仏殿は記録によれば、たびたび天災等で倒壊しその都度に建替えられたようですが、めいおつ明応7年（1498）の大地震で海水が大仏殿まで上がったという記事や、大仏が室町時代初期にすでに露坐みざであったことを書き残した紀行文のほかは、江戸時代初期に当地を訪れた欧州人の滞在記まで記録がありません。



高德院全景（手前が平成12年度調査区1区）



平成12年度4区 斜面堆積



平成12年度3区 岩顔面

調査は大仏が造立された位置や大仏殿の存在を明らかにするため、像の周囲で実施しました。

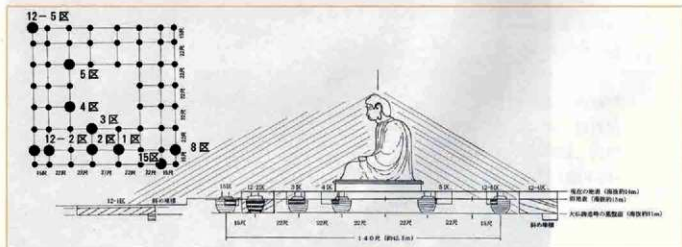
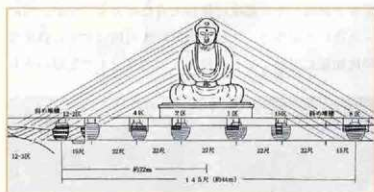
調査の結果、大仏の地下は現在の地表から約3m下で平らに整地され、さらにこの水平に整えられた地面の上には、周囲から像に向かって高くなるように斜めに堆積する土層がありました。また、3区からは14世紀前半代のかわけが多量に出土し、このほか溶けた銅片やふいごの羽口、銅を溶かすための炉の破片、^{どうき}鑄造時にカスとして出る銅滓など、^{どうさ}鑄造に係る多くの資料が埋まっていた。

ところで、像の表面には横方向に12・3段の線が付いています。このような大きな銅像はいちどに鑄られたとは考えにくく、像に表われた横方向の線は、下から数段に分けて鑄上げていった跡であると考えられています。

このことから大仏は、型を設置するたびに土を積み上げ、上へ上へと順々に鑄造されたものと推定されます。そして鑄込みが全て終わったのち盛り土や型が取除かれて、像の覆い屋として大仏殿が建てられたことがわかりました。ただし、瓦が出土していないので、その屋根は檜皮葺や柿葺だった可能性も考えられています。



平成12年度1区 土層堆積状況



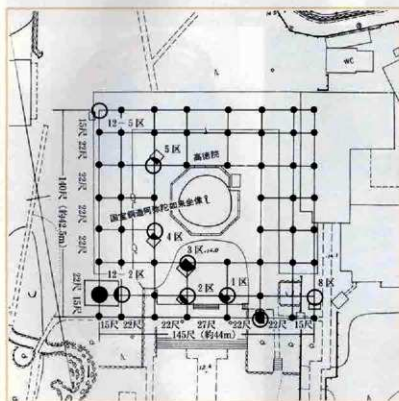
大仏周辺掘削図で遺構模式図



平成12年度2区 大仏殿礎石下の根固め



平成12年度2区 大仏殿礎石下の根固め



大仏殿の規模 (推定図)



平成13年度3区 大仏殿礎石下の根固め

平成12・13年度に実施した調査では、大仏の周囲で、現在の地表から約1m下に砂利と土丹を交互につき固めた「根固め」が10個見つかりました。「根固め」の遺構は周辺の地面より固くつくられているところからこの上に礎石をのせたと考えられ、これらの「根固め」遺構を結ぶと、大仏殿の規模は東西145尺（約44m）南北140尺（約42.5m）であったことが想定されます。このことは、宝永元年（1704）の古文書に、地表に60個の礎石が東西25間（約45m）、南北21間（37.8m）の範囲に配されていたことが書かれており、東西方向が発掘調査で得られた大仏殿の推定規模とほぼ一致します。

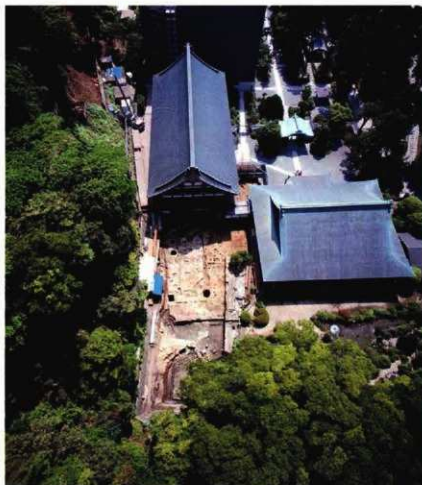
ところで鎌倉大仏は、制作期間や造立の経緯、さらに室町時代以降露坐となった理由などいまだ解明されていない点も多くのごさされています。これがかえて、多くの謎をもつ像の魅力をさらに引き出しているのかもしれません。

2. 史跡建長寺境内の発掘調査

応永大火前の伽藍の痕跡

建長寺は鎌倉五山の第一位。正式には巨福山建長興国禅寺こふくさんけんちやうこくこくぜんじという、臨济宗りんじしゅうの寺です。開山は宋僧の大覚禅師蘭溪道隆おおくぜんじらんけいどうりゅう、開基は鎌倉幕府の執権北条時頼ほうじょうときより。創建については建長元年（1249）と同3年（1251）の2説がありますが、今のところ定かではありません。

建長寺の伽藍は永仁元年（1293）の大地震や、正和4年（1315）の塔の火災かうさい、応永21年（1414）、同33年（1426）の大きな火災等によって焼失しましたが、そのたびごとに再建されました。また、近世では正保4年（1647）しょうほ、安永2年（1773）あんえいに再建の記録があります。そのため、創建当初のみならず、中世の建物はなにひとつ残っていません。



調査区全景



漆器皿



青磁碗



銅製環珞（茗荷型）



建物跡



池跡



顔の墨画・墨書のあるかわらけ

「寿」
「方」
「方」
「方」



池跡

中世の建長寺伽藍を示す史料としては、唯一「^{けんちんじがらんさしず}建長寺伽藍指図」(鎌倉市指定文化財)があります。この図は元弘元年(1331)に描かれた指図の写しですが、建物の規模や配置等、詳細にわたって往時の姿を知り得ます。

平成12年に^{だいにくり}大蔵裡の北裏で実施した発掘調査地点(写真)は、「建長寺伽藍指図」に見える^{だいきやうでん}大客殿、^{とくげつろう}得月楼などの建築物や池等にあたります。ここからは大規模建物の跡が発見され、さらにその東側には池の跡が見つかりました。

池の跡には多量の出土品があり、殊に室町時代と推定される土層中からは焼けた^{たて}建具の材の破片や仏具・^{しょうごんて}荘厳具、漆塗りの天目椀や^{てんもくわん}膳などが大量に廃棄された状態で発見されました。漆塗りの皿や椀には「福山方丈三百^(掛)□」などと書かれていて、当時の寺の勢いがうかがえます。これらの焼けた品々は、いっしょに出土したかわらけ等の年代から、応永21年(1414)の大火のものと推定されます。

建長寺は前述のとおりその後も数度火災を受けており、今回の発掘調査の成果は、中世建長寺の歴史や伽藍の姿を知るうえで貴重な資料と言えるでしょう。

3. 水道山遺跡

弥生時代の人々のゴミ捨て場？の跡

遺跡は台四丁目、「水道山」と呼ばれる丘とその周辺にあり、宅地開発される以前には、弥生時代中期後半～古墳時代にかけての土器片が多数散っていた所です。今回の発掘調査は、湘南モノレール富士見町駅から南へ約350mほど離れた地点で実施され、ここからは縄文時代～平安時代までの遺物が多量に出土しました。しかし、当地は西に向かって開ける谷の中にあたり、今回の調査では竪穴^{たてあな}住居址や掘立柱建物跡などの遺構はまったく発見できませんでした。また、遺物の出土状態などからしても弥生時代の人たちが生活した集落の跡とは考えにくく、この場所はこれらの人々の土器捨て場か、あるいは土器が東側の丘陵から流れ落ちて溜った所ではないかと推測されます。

なお、当地の南隣では、昭和55年の発掘調査によって、32軒の弥生時代～古墳時代の竪穴住居址が見つかっています。



土器出土状態



土器出土状態



出土した土器（弥生時代～古墳時代）



調査区全景



トレンチ全景

4. 材木座町屋遺跡

由比若宮（元八幡）付近の奈良・平安時代の遺跡

材木座町屋遺跡は海に面し、材木座一～三、五、六丁目の東西約720m、南北約600mの範囲にわたります。『吾妻鏡』の建長3年（1251）12月3日条には、商売を営んでよい場所として大町、小町等7ヶ所が書かれており、その内のひとつに「和賀江（現在の材木座カ）」の名が見えます。

本調査地は由比若宮（元八幡）の北西約50mの所に位置します。今回の調査では中世の遺構のほかに、奈良時代の掘立柱建物跡が6棟発見されました。

調査区西側の6棟の掘立柱建物跡の四角い大型の柱穴列は、奈良の平城京をはじめとして、各地の奈良・平安時代の郡衙（役所）跡推定地に見られるものと形状などがほぼ一致しています。また、当調査区は、奈良・平安時代の役所跡と推定される御成小学校内の郡衙跡からは約650mほど離れていますが、竪穴住居址などがみつからないことなどから、郡衙に関連した施設であったと考えられます。

鎌倉では古代の掘立柱建物跡が、御成小学校内の郡衙遺構、若宮大路周辺遺跡群等7ヶ所でみつかっています。当地の掘立柱建物が御成小学校内の郡衙遺構に関連した古代の施設の跡であるとすれば、今回の発掘調査の成果は、由比若宮が造営された経緯や、奈良・平安時代の古東海道の道筋を推定するうえで貴重な発見と言えるでしょう。

なお、中世の施設としては道路状遺構や木組の井戸などの他に、溝が数条発見されました。



古代の掘立柱建物跡全景（6棟）



古代の獨立柱建物跡



古代の獨立柱建物跡

～中世～



道路状遺構（中央）と溝



護岸された溝



木組のある井戸

5. 大倉幕府周辺遺跡群

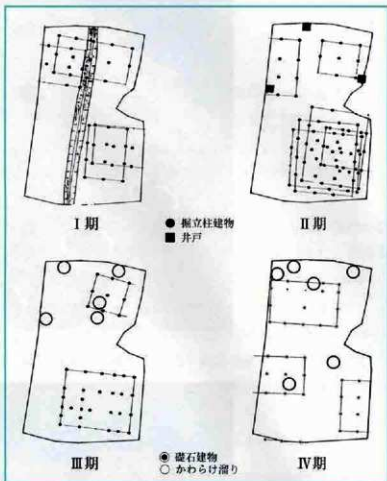
大倉御所周辺の屋敷の跡

遺跡は鶴岡八幡宮の北北東にあり、大倉幕府跡（大倉御所）推定地をコの字形に取囲んだ東西600m、南北350mの範囲です。発掘調査地点は清泉小学校北東角に近く、東御門と呼ばれる地域の一角です。

当地の北東側には小高い丘があり、その先端部には荏柄天神社が鎮座しています。その参道の南端は六浦道（現県道金沢鎌倉線）と交わっており、幕府とその周辺地域は頼朝が入府する以前から交通の要衝であったと推測されます。『吾妻鏡』によると大倉御所の周囲には御家人らの屋敷があったといい、また、鎌倉時代後期にはこの地域が「大倉辻」と称されて「町屋」と呼ばれる商業地域になったことが記されています。

発掘調査の成果によれば、発見された遺構群の年代は12世紀末～13世紀初め（Ⅰ期）、13世紀中頃～後半（Ⅱ期）、14世紀前半～中頃（Ⅲ期）、15世紀代（Ⅳ期）の4つの時期に分かれます。Ⅰ期からⅢ期にかけては堀や掘立柱建物、井戸などが数度つくり替えられ、屋敷の一部であったことが推測されます。さらに、Ⅳ期では、堅くたたきしめられた地面の上に礎石建物やかわらけ溜りなどがあり、寺院の境内か屋敷の中心であった可能性が考えられます。

当地からは素焼きのかわらけや中国陶磁器、国産の焼物などが大量に出土したほかに、銅製の鏡や金銅製飾金具等貴重な品々も見つかっています。



遺構の変遷



かわらけ溜り（Ⅲ期）



銅製鏡（Ⅳ期）



I期の遺構 (全景)



II期の遺構



I期の遺構



礎石建物 (IV期)

Excavated Cultural Properties in Kamakura 5

1.Kamakura Daibutsu (Great Buddha)

Kamakura Daibutsu, situated in Hase, is 11.39 meters high and the second largest sitting Buddhist statue in Japan. It is said that the bronze statue started to be cast in 1252. The excavation around Kamakura Daibutsu (Kō-tokuin Temple Area) was done in 2000 and 2001 to push forward the inscription on the World Heritage List. There we found the inclined stratum from the circumference upward to the statue, large quantities of Kwarake dish of the first half of the 14th century and relics on casting such as melted piece of copper, tuyere of bellows, fragments of furnace and smelting waste. So it is presumed that the statue was cast in bronze partially from the bottom with piling earth. We also found ten traces of a pillar base stone setting and presumes that Daibutsuden (Great Buddha Hall) was about 44 meters long from east to south and about 42.5 meters long from south to north. The length from east to west almost agrees with the one, about 45 meters long, in the description of the old document dated 1704.

2.Kenchōji Temple Area

Kenchōji Temple belonging to Rinzaï sect was founded by Rankei Dōryū, Chinese priest, in 1249 or 1251 and became the first of five biggest temples in Kamakura. The excavation on the north side of the Daikuri (large priests' living quarters) in 2000 showed the site of the large building and the pond on the east side. In the site of the pond we found lots of relics such as Kwarake dish, fragments of burned building materials, Buddhist altar fittings, ornaments, lacquered Tenmoku bowl and small dining table. The inscription on the lacquered bowl tells us that the bowl was one of three hundred pieces for the use in Kenchōji Temple. Because of the date of Kwarake dish, it is presumed that these relics were dumped in the great fire in 1414. These sites correspond to the buildings painted in Kenchōji Garan Sashizu (map of Kenchōji), reproduction of the one in 1331. So they are precious materials to understand Kenchōji Temple in the Medieval Period.

3.Site of Suidōyama

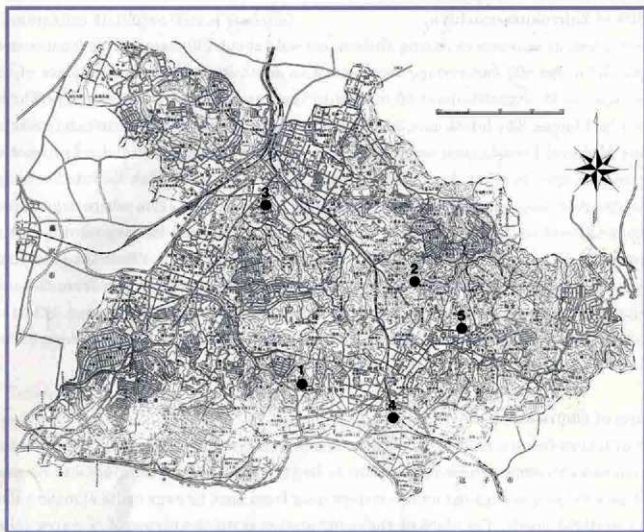
The site is situated on the hill called "Suidōyama" in Dai. The latest excavation was done in the valley to the west, about 350 meters to the south of Fujimichō station of Shōnan Monorail. There we found large quantities of potteries from Jōmon to Heian Period. But we could not find the site of pit dwelling and posthole-type building at all, so we suppose that the place was dump or where the potteries ran down from the east side of the hill.

4. Site of Zaimokuza-machiya

Site of Zaimokuza-machiya, facing the sea, extends about 720 meters long from east to south and about 600 meters long from south to north in Zaimokuza. The place of the investigation is situated about 50 meters to the northwest of Yui-wakamiya Shrine (Moto-hachiman). The latest excavation in this site brought out the structural remains in the Medieval Period, such as road, well with wooden framework and a few lines of ditches, and the site of six posthole-type buildings in Nara and Heian Period. The shape of large square postholes almost agrees with the one excavated from where is presumed to be the site of county seat in Nara and Heian Period, such as Heijokyō in the city of Nara. We did not find the site of the pit dwelling, so the site of posthole-type buildings is supposed to relate to the county seat even if about 650 meters away from the site, in Onari elementary school, presumed to be the county seat in Nara Period. And this excavation is the precious discovery to presume the foundation of Yui-wakamiya Shrine and the route of old Tōkaidō in Nara and Heian Period.

5. Site of Ōkura-bakufu Area

Site of Ōkura-bakufu Area is situated to north-northeast of Tsurugaoka Hachimangū Shrine and surrounds where is presumed to be the site of Ōkura-bakufu (Ōkura-gosho) with ko (コ) shaped figure and 600 meters long from east to west and 350 meters long from south to north. The place of the investigation is on the corner of the area called "Higashi-mikado", near to the corner of northeast in Seisen elementary school. The latest excavation in this site brought out the structural remains in four periods; the first period from the end of 12th to early 13th century, the second from the middle to the latter half of 13th century, the third from the first half to the middle of 14th century, the fourth 15th century. The structural remains from the first to the third period is presumed to be a part of the residence because moats, posthole-type buildings and wells were made new for several times. And the one of the fourth period is presumed to be the center of temple or residence because there were the building constructed on base stones and the accumulation of Kaware dish on the hard ground. We also found a lot of ceramic ware made in China and Japan, bronze mirror and metal fittings for ornaments in gilt bronze. The old documents Azuma-kagami tells that there were the houses for Gokenin, influential men of Bakufu, around Ōkura-bakufu and that this area, called "Ōkurano-tuji", became business district in the latter half of Kamakura Period.



《掲載遺跡名称一覧》

1. 鎌倉大仏周辺の発掘調査（長谷四丁目550番2）
2. 史跡建長寺境内の発掘調査（山ノ内字巨福山8番）
3. 永道山遺跡（台四丁目1169番1）
4. 材木座町屋遺跡（材木座一丁目910番）
5. 大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄58番4外）

鎌倉の埋蔵文化財 5

発行日 平成14年3月31日
編集・発行 鎌倉市教育委員会
印刷 中川印刷株式会社